

学位論文審査の要旨

学位申請者	Guarini Letizia 比較社会文化学専攻2014年度生		論文題目	娘が父を語る時～現代日本女性文学に見る父娘関係～
審査委員	主査:	大塚 常樹 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副査:	谷口 幸代 准教授		「否」の場合の理由
	副査:	戸谷 陽子 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	宮尾 正樹 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	石井 久美子 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Japanese Literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

レティツィア・グアリーニ氏は大学院前期課程から一貫して「現代日本文学における父の娘」というテーマで国際的な研究活動を行ってきた。「父の娘」とは、男性優位の家制度下において、父からの束縛を憎みつつも依存する娘、あるいは父を理想的な男性として内面化する娘のことである。グアリーニ氏は、ギリシャ悲劇に見られる父と娘を巡る神話構造が現代まで、社会制度や文学に継承されてきたという観点から、本論文では、父と娘の関係を正面から取り上げた三人の女性作家に焦点を当てて、「父の娘」の脱構築の方向性を論じた。

第一部は男性作家優位の文壇の中で、男性性の象徴である論理を逆手にとって、文壇の父である文豪作品のパロディを用いて「父の娘」の脱構築を目指した倉橋由美子を取り上げた。第一章の「聖少女」では、父と娘との近親相姦を描くことで、処女性を基盤とした少女小説における異性愛規範をパロディ化したとする。第二章の「長い夢路」と「河口に死す」では、父に尽くす従属的な娘の物語と見せかけつつ、父の側からの放棄による皮肉な模倣やひねりを見いだした。第三章の「向日葵の家」と「神神がいたころの話」では、父に尽くし母を憎むエレクトラ型の娘と父の権力を代行するアテナ型の娘を描きつつ、登場人物たちに演技性を自覚させることで神話原型をパロディ化したとした。

第二部では、父の暴力の被害者である娘はなぜ父を殺せないのか、という問いの答えを探求するテキストとして、私小説的に自分の人生を題材にしつつ、実父からの暴力や虐待、文化的な父からのテクスチュアルハラスメントを書き続けた柳美里を取り上げた。両者の柳への支配の様相や、それからの自立の過程を、第一章では実の父をモデルにした「フルハウス」やドキュメンタリーの「ファミリー・シークレット」等を通して分析し、第二章では、小説家としての柳を支配した文化的な父である東由多加との関係を、「雨と夢のあとに」や「黒」等を通して論じた。その結論として、過去の記憶に依拠している限り父の支配から抜け出せず、記憶の虚構性への気づきと、文化的な父を看取り、テキストから排除することで、柳が自立していくことが可能になったと結論づけた。

第三部は母と娘の関係を描いた作家とされる角田光代が父と娘との関係にも注力していることを新しい視座として提示した。第一章では「ゆうべの神様」「父のボール」が、虐待される娘たちが難民になる危険性があることを指摘した作品であるとした。第二章では「キッドナップ・ツアー」等で、家父長制から逸脱した父との友人的な父娘関係が描かれ、新たな家族イメージが示唆されていると指摘した。第三章では「空中庭園」等を、愛ある理想の家族が実は演技によるものだという虚構性を明らかにした作品と位置づけた。

第1回審査委員会は12月23日に行われた。特に大きな修正は求められなかったが、細部の日本語表現の修正や見取り図の明確化、パロディとパステルカラーの違いの明確化などが求められた。修正論文は1月末に提出され、第2回審査委員会はメール会議で行い、修正が十分に行われていることを確認した。公開発表会は2月17日に行われ、パワーポイントを利用してわかりやすい説明を行った。質問にも誠実に回答した。最終審査会は公開発表会の直後に行われた。論の目的や意義が高く、構成や文章力が優れていること、分析が的確であること、ギリシャ神話やフェミニズム理論への造詣が深く、適材適所に用いられていること、同じ観点で多くの作家の分析が可能であること等、高く評価できるという結論に至った。よって本論文を博士号(人文科学)、Ph. D. in Japanese Literatureを授与するにふさわしいものと認定した。